Peter Siewert, hrsg., *Ostrakismos-Testimonien I : Die Zeugnisse antiker Autoren, der Inschriften und Ostraka über das athenische Scherbengericht aus vorhellenistischer Zeit (487-322 v. Chr.)*. Historia Einzelschriften ; H. 155, Ss. 555, Stuttgart, Franz Steiner Verlag 2002. € 100.

現在までにアテナイで発見されたオストラカの数は約1万1000点に上るという．オストラキスモス研究の始まりは16世紀にまで遡るが，実際のオストラカが発見されたのはやっと19世紀末になってからのことであり，それまでは追放者の名は貝殻に書かれたと誤って信じられていた．1931年からアメリカ隊はアゴラの発掘調査を開始し，1965年までに1658点のオストラカが発見されていたが，その年以降オストラカの出土数は爆発的に増えることとなった．1965年から1969年にかけてドイツ隊はケラメイコスを発掘調査し，そこで9000点以上のオストラカを発見したからである．特に1968年のエリダノス川の土手での「大発見」では一度に約4500点ものオストラカが出土した．この「大発見」のオストラカは前471年に実施されたオストラキスモスに使われたものだと考えられている．アテナイの土中にはまだまだオストラカが埋まっているらしい．

オストラキスモス関連史料を初めて一つの本にまとめることを企画して編まれたのが本書である．本書は4部から構成されている．第1部「序論」では，オストラキスモス研究の歴史が概観され，本書におけるオストラキスモス関連史料の収集原則とアウトラインが示される．第2部「オストラカ史料(前487～416年頃)」では，アゴラおよびケラメイコスでこれまでに発見されたオストラカ史料が収集される．第3部「その他の史料」では，オストラキスモスに関する文献史料が主に収集され，詳細な注釈が付されている．但しこの中には陶器に描かれた図像資料と石碑に刻まれた碑文史料も1点ずつ含まれている．第4部「ヘレニズム期以前の史料の総合的分析」は，これらの史資料を，A. オストラキスモス訴訟手続きに関する用語法，B. オストラキスモス制度に関する史料の証言，C. オストラキスモスのターゲットにされたグループに関する史料の証言，D. 史料の伝承状況，E. オストラキスモスの元来の目的，の五つのテーマに分けて分析している．本書にはヘレニズム期やビザンティン時代の史料が含まれていないこと，ケラメイコス・オストラカの出版が準備中であることの理由から，編者は本書を「経過報告」と位置づけている．タイトルにIという番号が付されているのはそのためだろう．以下，興味深い指摘を紹介していこう．

① オストラキスモスが実際にいつどのように実施されたのかを伝える史料は少ない．特に興味深いのはチェルヴェテリで発見された「パンの画家」が描いた前470～460年の陶器画である．この陶器の内側と外側には，ザルのようなものに何か不定形の物体をたくさん容れて運んでいる若者や，同じ不定形の

物体が詰まった壺の前で書板とペンを持って立っている男たちや，犠牲獣を燃やしてそれにお神酒を注いでいる男たちが描かれている．確証はないが，どうもこの絵に描かれている不定形の物体はオストラカであり，この絵は票の集計の様子を表しているのではないかと推測されている．一方，文献史料からの断片的な情報によれば，オストラキスモスの定足数は6000票であったこと，その中で最多票を獲得した者は弁明を許されることなく10年間の国外追放に処されたこと，投票した市民の中には自分で文字が書けない者もいたので投票の秘密は必ずしも保証されなかったこと，オストラキスモスは評議会とアルコンたちが指導したこと，毎年1回，第6当番評議会の時にオストラキスモスを実施すべきかどうかを決める予備投票が行われたこと，オストラキスモス自体は第8当番評議会の時に行われたらしいことなどが分かる．

② オストラキスモスの創設時期と創設者については，アリストテレスの『アテナイ人の国制』が書かれたパピルスが発見された1891年までは，アンドロティオンの証言に基づいて，創設者は分からないが，創設時期は前487年より少し前と考えられていた．しかしこの新発見のパピルス文書によれば，オストラキスモスの創設者はクレイステネスであり，従って創設時期は彼の改革が行われた前507/6年頃，その目的は僭主を予防することにあったという．しかしアンドロティオンは前340年頃の，『アテナイ人の国制』は前330～320年代の史料であり，初期の史料には創設に関する情報が見られないことから，これらの解釈は前400年以降のギリシア人がオストラキスモスの創設を僭主予防と結び付けて説明しようとした結果であると考えられる．

③ オストラキスモスの元来の目的に関しては，それを党派争いの道具とする説や僭主予防の道具とする説はどうも当てはまらない．アンドロティオンは，元来オストラキスモスはペイシストラトスおよび彼の周辺にいる人々を，僭主政を目論む危険人物のグループとみなし，彼らをターゲットとして創設されたと説明しているが，初期の文献史料やオストラカには僭主予防に言及したものはない．確かにオストラキスモスの犠牲者の殆どは上層市民であり，政治的影響力を持っているあるいは持つと危惧された人々であったが，その具体的理由は，背信，ペルシア贔屓，買収，習慣に反した生活態度(富の誇示)，道徳的堕落(性的逸脱)，呪い，名誉欲など様々であり，これらは全て「不正」という語で表されるものであった．つまりオストラキスモスは，僭主予防も含めて共同体生活を乱すあらゆる行為に対する罰であったのである．編者の結論を一言でまとめるならば，オストラキスモスの原理とは共同体から突出して市民的平等

を損ねる者を排除することであり，オストラキスモスとは民主政的平等を実現するための道具であった，ということになるであろう．

この結論はオストラキスモス研究にとってのみならず，碑文建立を巡る研究にとっても示唆的である．なぜならばオストラキスモスが貴族的な富や名声の掲示を阻止するための制度であったならば，碑文建立はポリスに貢献した市民ならば誰でも与ることの出来る名声の民主的な掲示を促進した制度として，両者は表裏の関係にあったと考えられるからである．碑文建立の研究をオストラキスモス研究と連動させて考えてみると面白いのではないだろうか．

前野弘志(広島大学)